

R8 第 4 回社会教育委員会 会議概要

日時：令和 8 年 6 月 18 日（木）14：00～16：00

場所：塩見記念青少年プラザ 3 階会議室

出席委員：斉藤雅洋、岩井拓史、川上確也、徳増千里、眞鍋大輔、森岡千晴、吉田友一、
佐竹真紀、松田弥花

1 議事（委員発表、意見交換）（14:00～15:55）

（委員長）

今回からは、家庭教育支援の充実に向けた社会教育のあり方について協議して参りたいと思います。こちらのテーマは、前回の会議の中で、漠然と家庭教育に関することという話が上がったところから、より家庭教育支援の充実という部分に、社会教育がどのような役割を果たせるか等に焦点を当てて協議していこうという話も踏まえて決まったテーマかと思います。今日を含め 3 回という限られた協議となりますが、充実した協議ができたと思いますので、ご協力のほどよろしくお願いします。

それでは議事に入ります。家庭教育支援は、もともと高知県の教育振興基本計画にも位置づいているテーマですので、県の教育振興基本計画も視野に入れつつ、協議を進めていきたいと思います。これに関しては今後の協議の流れの中で、どういう形で私たちのアウトプットを作っていくか、流動的になるかと思っています。そういったどこに終着していくかも意識しながら進めていきたいと思っています。

まず最初に、事務局から家庭教育支援の充実に関して、過去の社会教育委員会での協議と、県の教育振興基本計画の中での位置付けなどについて簡単に説明をいただきます。その後、委員からご報告いただきます。委員は、学校での授業や個人で経営されている教室など、様々な場面で子どもや保護者と接していることから、そうした日頃の取り組みを踏まえて、地域の家庭教育の現状や問題点等について話題提供していただきます。その後、簡単に質疑応答をとり、社会教育委員会としてどの点に焦点を絞り、さらに協議を深めていくかを話し合っていきたいと考えております。

それではまず事務局より、説明をお願いします。

（事務局）

教育振興基本計画に関連した協議の方向性案と、平成 31 年 2 月の社会教育委員会において協議された家庭教育支援の充実に向けた 5 つの課題及びそれを踏まえた提言内容の概要を説明。

（委員）

～委員発表～

（委員長）

ありがとうございました。前回の委員会では課題が山積していて見えにくかった論点

を、今回の発表で大変丁寧に整理していただきました。家庭教育支援のそもそもの考え方であったり、親を責め立てるものではなく子どもの可能性を広げたり、選択肢を知るといった部分に重要なポイントがあるのではないかという提起をいただきました。またこの社会教育委員会での今後の進め方や論点もたくさん提示していただきました。

それでは、委員全員での協議の時間にしていきたいと思います。まずは事務局説明及び委員の発表に対して、感想や質問などありますでしょうか。

(委員)

以前、委員がアフリカに住んでいた際に考えていたことがあると発表にありましたが、それについてお聞かせください。批判的思考力はどのようにして身につきましたか。

(委員)

アフリカの村を訪れた際に、その訪問日にちょうど井戸が開通したところで、住民が皆喜んでいたのですが、その風景を見て何か腑に落ちない感情が生まれたことがあります。後になってその感情の意味が分かったのですが、井戸が開通する前は 20km 程歩いて水を汲みに行くという作業が発生しながらも、道中で立ち寄る村々で人と交流し、情報交換や食料調達など、様々なものが生まれていたのではないかと。便利になった一方で、そうした機会が失われたのではないかと。失われた機会については考えなくていいのか、ということに幼いながら違和感を覚えたのだと思います。水を汲みに行く時間が無くなったことで、学校に通い、基礎教育を受けることができる一方で、生活の知恵を得られていた機会を失ったかもしれない。何を選択するかを誰かによって選択されていないか、自分の人生を選択されないためにその選択肢を自分自身で作らないといけないのではないかということを考えるようになりました。

そういった経験が、子どもは見たことのない未来を選ぶのかと考えることに繋がっているのだと思います。

考え方がどのように育まれたかは分かりませんが、子どもの頃に景色も言語も何もかもが違う環境で生活することになったことがまず大きな衝撃で、様々なものを比較していたのかもしれませんが。また言葉が通じない相手が何を言っているか、何を求めているか、この場面で自分はどのような対応をすべきかと想像力を働かせざるをえなかったことで、すごく考えることが身についたのかもしれませんが。

(委員)

AI が発達し、ホワイトカラーの仕事もなくなっていく現代において、そういった思考力や自分で考える力が子どもたちには必要だと思います。地方はそういった危機意識がより薄いのではないかと懸念しています。だからこそ、外国に行けるルートを作っておいたり、多様な文化を子どもたちに教えてあげないといけないのではないかと思います。委員のお話を聞いて、なお強く思いました。

(委員)

A I が台頭してきた時代だからこそ、AI が作り出した文章が適切な内容であるかを見

極められる能力が必要になっていると思います。発表した資料にある3段階のピラミッドが全て揃い、クリアした人しか見極められない世界では、そこを通過できる人間でないと完全にAIに乘っ取られてしまう世界になるでしょう。そこに安易に乗っかればいい世界は、実現されるべき世界ではないと思います。

だからこそ、よりピラミッドの重要性があり、基礎学力があり、学ぶ力と活用する力があり、さらにその上に可能性を広げるような機会があるという体験をすることが非常に重要なのだと感じています。

(委員)

高知県には頼りになるおんちゃんやおばちゃんはいるけれども、その人たちが必ずしも子どもの未来を担うような、選択肢を広げるような専門的な情報を持っているとは限らない問題があります。善意はあるけれど情報がないというそのギャップを埋めるのが社会教育の役割ではないでしょうか。

正しい情報や様々な見地、知見を届かせる制度設計をするのが、ある種の社会教育の役割ではないでしょうか。人は、特に子どもには、未知の選択をする際に長期的な未来よりも目先の安心を選択してしまうというリスクがあるので、その外部との接触と言いますか、すべてを一度に抱え込まないための線引や、やらないことを明記することも実は大切なかなと思います。情報が氾濫している中で、情報を抽出する確度をより高め、情報がないところを埋めるのが社会教育が担うポイントなのかなとお話を聞いて感じました。

(委員)

どのようにすればいいでしょうか。

(委員)

地域差はあるけれども、知っている人が伝えていく。そのアウトプットの有無も必要だと思います。それをどういうふうな形でやるかは、地域で囲いきれないところもあるので、課題となりますが。

(委員)

私も地域で子どもの居場所づくりをしていることもあり、共感する内容でした。結局、一人一人が夢も思いも家庭環境も違う中で、社会教育という1つの仕組みだけで、何とか全ての子どもの可能性を広げてあげたいと思ってもなかなか難しいと強く感じているところです。

発表の中で、子どもの可能性を広げるという目的をゴールにおけるかという視点があったと思いますが、一步踏み出した先に可能性があるのではないかと私は思っています。じっとしていても可能性は広がらず、何も分からずともとりあえず1歩踏み出した先に、いろんな可能性が広がるんじゃないかと思っています。ただ、変わりたくても今いる場所が居心地がよく変わりたくないという感情はあると思います。やはり1歩踏み出すには、自分がやってみて、楽しい、嬉しい、心地いい、学びたいという気持ちの源泉を感じることが重要で、体験することで子どもが楽しさに気づき、主体性や自主性に繋がるのだらうと

思います。それをいかにそれぞれの子どもに合わせて環境を作っていくかが重要です。地域には様々な人がいるので、私は、それぞれの子どもの夢や可能性にマッチした人がいて、そういった人々と出会うことで子どもの可能性が広がるのだと感じているので、委員が整理してくれた議論を深めていくと、答えが出てくるのかなと思いました。

(委員)

基礎学力のところで、委員に質問です。基礎学力を身につけるために、知らないことを知るのが楽しいという状況を作るとか、基礎学力をつけるきっかけを先に作るべきだという議論もあるのだと思いますが、私はあまりそこに意味付けは必要ないのではないかと考えています。何のために勉強するのかは、例えば計算できたらこんなことが分かって楽しいというのは、やっているうちに何となく分かってくるのではないのでしょうか。

というのも、地域で子どもの勉強を見るなかで、子どもたちは気分がのってきたら自発的にすごく勉強をします。だからそこに意味付けするためにこういう体験をさせて実感させて勉強意欲を醸成するというよりは、基礎学力の部分は、意味づけの機会を作る前にまずやらせて、力がある程度ついた段階でその次のステップに行く方がいいのではないのでしょうか。

(委員)

おそらく発達段階も関わってくると思います。大人だと、無条件にやれと言われてもなかなか入ってこないけれども、小さい子どもは、理由はともかくやらなくてはならないこと、例えば人の話は聞くものとか、社会のルールや基本的な言葉といったしつけのような部分に関わります。例えば1年生はひらがなやカタカナを習いますが、自分の考えを字で表現できる楽しさがあるからひらがなやカタカナを書けるように練習しましょう、とはならないですね。とにかくやるというところから、だんだん学びができてきて、基礎的な土台ができてくる。すると、もっと難しい言葉で表現したり、自分の考えを表したい、違う表現が欲しいからこの前読んだ本を借りてきて自分の表現として使う段階になる。そういった中で自分の中で勉強の価値が付けられていきます。最初は強制的に教えられる面が逡巡的となり、自分が学びたい状態へと変容する流れになります。この段階を経る中で、最終的に自立的な学習者を育てることが目指されていて、1人1台配布されているタブレットはこれを支援するのに適しています。着席して学習することは苦手だけど観察するのが得意な子どもや、座って考えることが得意な子ども、友達の意見を聞くことで触発される子どもなどいろいろタイプがあり、タブレットがあることでタイプに合わせて教材を選択して自立的な学習に繋がれるというものです。

委員の質問については、従来のように、「やらないといけないからやりましょう」と強制する時期は必要ですし、だんだんそれができてきたら、その子どもは何がしたいのか、どうやったら自分に合っているかを自ら考えさせて、自立的な学習者に育てることが目標とされています。

(委員)

今、保幼小連携で、遊びが学びになっていくところからやりましょうというところにどんどん変わってきています。

(委員)

今の視点はすごく大事で、遊んでるのか学んでるのかも分からないというような教材が一番いい。実はこれ勉強だったんだというのは保育の未就学のときからやっていくと、そこが連携で見えてくる。私も保育園を訪れて、支援者が子どもたちに指示や助言とか支援をする風景を学んでいます。些細な遊びでも、子どもたちで話し合い、自分たちで決めるという合意形成をして、トラブルがあれば皆でまた合意形成をするという、合意形成の重なりを子どもたちが保育園で経験していきます。それが小学校に上がった際には、単に座って話を聞くように指導するのではなくて、そこでも合意形成をするような授業の仕方にとすると、自分たちがこう選択したからやっていくんだという考えに繋がっていきます。

(委員)

マイクラやレゴブロックも同じです。想像力を働かせて作り上げるという遊びながら学ぶというグラデーションにできるものです。

(委員)

そうです。人間がどのように長期記憶するかというと、命に関わることと興味があることは記憶に一番残る、記憶に定着しやすいというエビデンスが出ています。好きなことや遊びで学んだことは脳の機能と非常に相性がいいのです。

(委員)

今の子ども達は生まれたときからICTやネット環境が充実していて、世界と繋がっているのです。私たち親世代が知らないことをたくさん知っています。大人が信じたネットの偽情報をすぐに見抜いたりもします。今日の委員の発表を聞きながら、それをうまく使えばいいんじゃないかと思いました。子どもたちはもっと先に進んでいるのに親世代は知らないというギャップがあります。

(委員)

その家庭間格差を広げていってしまうのではないかという危機感を私は持っています。PCをゲーム以外で使う家庭が少ない環境だと、ネット上に散らばっている機会をどんどん拾えばいいじゃないかという話にはなりません。そこを親抜きで使いこなそうと思うならば、さっき発表したピラミッド構造は、絶対的に必要だと思います。

現実世界において、何かの機会に触れて、危険な目に遭ったり、リスクを体験していない限り、ネットの世界に入ったときに、それを危機として認識できないのだらうなと思います。そういうものも含めて、先ほど発表した基礎学力や学ぶ力と機会といったものと、ピラミッドをしないと、ITリテラシーも縮めていけない、家庭格差の要素になっていってしまうのではないかと考えています。

携帯電話が1つあればできる環境だからこそ、おそらく社会教育が今後すごく強い役

割を発揮しないといけなくなってくるのだと思います。絶対的に家庭でも地域でも補完できない格差が、圧倒的に広がっていってしまうと思うので、そこを唯一埋められるのは社会教育ではないでしょうか。

(委員長)

それでは、協議を次のステップに進めていきたいと思います。次第の②意見交換に記載されている「課題の整理・論点化」についてですが、本日まで発表いただいた内容と、事務局から説明のあった資料にある協議の方向性案や過去の社会教育委員会の提言、昨年度社会教育委員会で議論されていた家庭教育支援に関する話を踏まえて、今年度の社会教育委員会がどの辺りに課題意識を持ち、特に集中的に協議していくかを考えたいと思います。

また、もう1つ付け加えると、家庭教育支援の充実に向けた社会教育のあり方について、前回の「これからの社会教育と若者世代」と同様に、県社会教育委員会として県内に向けてメッセージを発していく際に、私たちが家庭教育支援に関わってどんなメッセージを出すかというゴールを念頭に置いた絞り方、焦点化が重要と思います。みなさまいかがでしょうか。

(委員)

先ほどの発表を受けて考えましたが、社会教育委員会を開催できる回数も少ないことから、あまり深掘りすることは難しいと思っています。行政の施策も重ねながら考えたときに、一番の基礎学力、信頼できる繋がり、どのページでも、社会教育が関わっているし今どう束ねていくかという束ね方は確かにないです。学校教育でいうと、1年生に上がったときに、どのぐらい読み聞かせをしてもらっているのか、どのぐらい家に本があり、活字に目を通していているかは既にかなり差があります。

社会教育でどう取り組めるかという、どんな家庭であっても、その地域には読み聞かせの機会があり、親はしなくても地域の人がしてくれるという環境や、家に本がなくても公民館の入口や病院の入口など、少し足を伸ばせばたくさん本があるという環境づくりがあると思います。資源がないところでも、どうリソースを生かすか様々な工夫をするところに社会教育が関与できるのではないのでしょうか。

発表資料では、複雑化する問題の連鎖が無限に続く循環に入ってしまうことが問題点として挙げられていましたが、私は割とプラス思考で考えています。多様な世界との接点があり、地域だけでは不可能な状況でも、企業や大学の関与があって、様々な価値感がありつつも取り組めています。実際、学校に、地域の企業に来てもらって、企業の資金が入ることで、お米を持続的に作れることになりました。種もみを蒔いて育て、刈り取りから販売までをできました。これは、学校の予算だけでは絶対できません。企業が機械を無償で貸してくれたり手伝ってくれたりというところがすごく大事で、そこに大学生も来て田植えを一緒にやってくれました。

そういった好事例を横展開できる、紹介するというのは、校長会でもやっていますし、

できるのではないのでしょうか。

政策としては予算が限られているので、図書館や、図書館がなくても公民館の入口に本を置いて、分室みたいな形で、ここに返してもここで借りられるといった、地域が狭いからこそできる1つのアイデアかと思います。

また様々な世界を知るということであれば、社会教育委員会で繋がりのあるシンガーソングライターに学校に来てもらって、その仕事の大変さや楽しさを語ってもらいながら、そういう世界もあるんだというのを子どもたちが学ぶ機会も設けることができました。そのほかにも、Y o u T u b e r やプロサッカーの監督にお話を聞ける機会を設けたこともあります。

こういったように、自分の世界しか知らない中で職業をどうしようか悩むよりも、外部から来てもらうことによって、世界を広げることができます。今挙げたのは学校で取り組んだことですが、学校でなくてもこれはできるでしょう。例えば、公民館でそういった人とふれあえる機会を設けて、地元にはない職業を知ってもらうことができると思います。公民館、社会教育がそういった機会を作り、学校と連携してチラシを配ってもらうなど、いろいろ可能性はあるのではないのでしょうか。

家庭教育支援でいうと、自分の家ではできないけど、地域で読み聞かせしてもらえたり、あるいは知識がないので教えて欲しいという親に対して講座を教えたりできると思います。県でいえば、家庭教育基盤形成事業がそういったことを支援しています。

とにかく、全ての鬼門となっているのが、基礎学力の特に読む力がないことで、これがないと世界が広がりません。そのため、今の義務教育ではここに重点が置かれていて、私の学校ではとにかく読書をする時間や本に触れる機会を増やしたり、黒板にふりがな付きで漢字を書いたりして活字の世界が広がるようにもしています。こういった中で社会教育の一環として図書バスに来てもらうことは有効だし、家庭教育の中で本という資源が家庭の文化にない家であっても、そこに社会教育が本を提供することで子どもの世界を広げることに繋がるでしょう。

社会教育委員会としては、そういったことを土台において、子どもの学びを中心に様々な方法を束ねて提案することが着地点としていいのではないのでしょうか。

(委員)

委員の今のお話は、橋渡しや、義務づけ、継続伴走などの様々な活動を束ねて支援していくという話だったと思います。この社会教育委員会には学校関係者だけでなく、公民館関係者や地域で活動している人など多様なプレーヤーの人がそろっているので、例えば、今委員が挙げられた1つの事例について、地域や家庭等の様々なポジションの方が皆で展開するとしたらどんなモデルケースができるかを作ってみてはどうでしょうか。学校でやっている活動に対して、地域や家庭、公民館としてはこういう関わり方があり、役割を担えるといった仮想のモデルケースを組んで提案の形にしてみる。それは、次の段階では実際に委員の学校で取り入れてみたらどうなったかが分かるといった発展もあると思

います。

特定の学校で実施されている素晴らしい取組を他校におすすめしても、それを教員が段取らないといけないのであれば、忙しさから腰が重くなる教員はたくさんいると思います。それに対して、地域や公民館などがどのようにサポートできたり役割を皆で担えるから、子どもたちの考える力を伸ばす方法として取り入れてみたらおもしろくないでしょうかという話でもっていければ、教員の皆さんも心強くやれるんじゃないかと思います。そして、もしかしたら同じモデルケースを基に取り組んだはずの施策が、地域ごとに違う結果になれば、その理由を考えるのもおもしろいでしょう。

(委員)

おもしろいと思います。非常に興味深いです。

(委員)

ただ、私の取組は家庭教育支援に特化していないことが気がかりです。

(委員)

そこは問題ないと思います。要するに家庭教育支援というものは子どもの可能性を保障するものだと思うので、その保障に繋がっていくのであればいいと思います。

(委員)

分かりました。モデルケースを考える場所についてですが、その土地ごとにリソースが異なりますよね。私のケースとしては、先日、保育園と小学校1、2年生の合同で、保小連携の事業運営をしましたが、実は高知大の先生が学校運営協議会に入ってくれた関係で高知大学地域学校協働学部の学生が来てくれたり、近所にある県立農業大学の学生も来てくれたりして、芋の苗を植えるという取組ができました。この取組では、小学校1、2年生が苗の植え方などを学んだうえで保育園児に教え、それを周りで地域の人たちが囲んで見守るという形をとったのですが、これにより、小学校入学前に保育園児が小学生と交流することができるので小一ギャップ予防に役立つ取組だったのかなと思います。またもちろん、家庭で作物を育てた経験がない子どもにとってそれを経験できる機会にもなりました。そういったことをできたという意味で、いの町で考えるのはとてもいいと思います。

また、香美市も同様に高校や大学があるので保幼小中高大が揃っていて、なおかつ「よってたかって教育」のとおり地域連携もある地域ですよね。島根県益田市で取り組まれている「カタリ場」は、NPOが運営して地域の人を巻き込んで成功しています。

結局、ファシリテーターやプレーヤーがいれば必ずできるものだと思います。それは学校の先生やNPOの方、公民館職員など、ファシリテートする人さえいれば、協力していいという人は必ず出てきて繋がっていくと思います。

(委員)

やはり仮想のまちでのモデルケース作りがいいと思います。実際に取り組みをしている学校の一例から派生して、もちろんそのまちには小学校が何校、高校が何校など、様々

な前提を置かないといけないとは思いますが、そのまちで何ができるかを各委員が考えてそれらをおもしろく束ねて形にしませんか。

(委員)

賛成です。

(委員)

本日の発表を聞いていて、やはり家庭だけでは出会えない学び合いの世界や機会を、社会教育だからこそ届けることができて、繋がることも続けることもできるのかなと再度感じました。私たち青年団も、この学校以外の地域の、特に放課後の子どもたちの居場所づくりに力を入れています。モデルケースや実験事例がいくつかあれば、その提案を見た方々も生かしやすいのではないかと強く思いました。

放課後の居場所づくりについては、高知高専を休学して駄菓子屋さんを始めた女の子が復学するので、駄菓子屋を継続するために、地元の青年団や高知大学生が運営を繋いでいこうとしています。そこには様々な環境の子どもたちが来ていて、家庭の状況がよく見えて、大学生も私達大人も学ぶことがとても多いです。そういった多世代が集う機会が作れるのは、社会教育ならではの感覚だと思います。

最後に、何年も社会教育委員会に所属している中で、社会教育の重要性を届けるのはなかなか難しいと感じることもありました。そのため、今年度は社会教育は社会課題の解決に繋がっていることを、さらに多くの人に伝えたいと思います。具体的には、提言や提案を作るのも1つの手法ですが、行政に対して社会教育主事を配置しませんかと伝えたり、民間団体に対しては、こういう機会に関わりませんかと伝えるなど、社会教育委員会としても発信をしていきたいなと思いました。

(委員)

様々な会合に行った先で施策を示されることが何度もあるのですが、県も市町村も家庭教育支援の施策の量が格段に増えていると感じています。ただ、本日の発表を聞いていても感じたのが、重要なのは施策量が多いことではなく、子どもの可能性を広げる整備に組み替えていく、数ある取組が一本の線に繋がるように、構造を変えることに比重を置いたほうがいいのではないかと思います。

私自身もよく言うことですが、人と地域の可能性を広げることが社会教育だと思っていて、そのためにあえて何をやってもいいという魅力があると思います。とはいえ、本来家庭ですべきことを地域が代わりにすることもできないと思いますので、領域整理を図りながらどのように一本線、むしろ面にしていくのが課題だと思います。学校運営協議会にしても、重要なのは地域でどういう子どもに育てたいのかというビジョンをまず整理することで、せっかくいいアイデアがあっても地域と学校の連携不足で実現しなかったというパターンを見聞きしたこともあります。綿密なビジョン共有の重要性を再認識したところです。

それから、発表の中で指摘のあった「何を見れば政策が機能しているといえるか」とい

う点がすごく勉強になりました。参加者数や開催回数を成果として挙げがちですが、あくまでそれは手段や指標であって、橋渡しや伴走支援が適切に回っているかや継続性に焦点を当てることは重要ですね。公民館の講座にしても、そこで講座を受けた方が次にグループを作ったり、他の場面で講師になるのがひとつのゴールだと考えています。

(委員)

学校や地域で様々なイベントがあり多種多様な人を呼んでくれるのですが、重要なのは、誰か呼べばいいという話ではなく、その人を呼んだことで子どもたちの疑問や興味が広がった先に、次はどの人を呼ぶことでどう繋げていくかを意識することだと思います。手当たり次第に誰かを呼んでみるという単発の取組ばかりでは、そこから子どもたちが何かに結びつけていくのは難しいのではないのでしょうか。

(委員)

領域整理はしつつも一緒にやる部分とのバランスがとても大事ですね。それを意識せずにどんどんやると、課題の連鎖で迷宮入りしてしまうので。

(委員)

同意見です。領域整理をした上で、1つのモデルケースで、こういう壁に当たった時はこうやって乗り越えられるということが分かれば、皆さん行動しやすくなるのではないのでしょうか。

(委員)

社会教育委員会としての本質を目指すなら、単なる施策の承認機関というよりも、子どもの未来を担い保障するための設計や責任のプロジェクト戦略本部という認識で、よどみのない情報発信をすることで、戦略的に制度を決めていくためのアプローチを担う機関として取り組みましょうということですね。

(委員長)

このあたりで次の議論に話を移したいと思います。その前に、課題の整理と、論点の焦点化について簡単にまとめます。まず私たちが考える家庭教育支援とは、子どもの可能性の保障ということでよろしいでしょうか。

(全委員)

賛同。

(委員長)

次に、次回以降から具体的に何をしていくかですが、1つは家庭教育支援の視点から束ねて一本の線に繋げるために、どのようなレベルの施策や事業を対象にするかを考えなければいけません。例えば県の施策事業を、家庭教育支援の観点から一本線に繋いだり、または、どこか特色のある市町村の施策事業を取り上げて一本線に繋げたり、領域整理をしていくことかと思われます。

また、本日の発表資料の中で、橋渡しや意味付け、伴奏という支援者やファシリテーターの役割に関するキーワードが出てきましたが、そうした観点から事例を分析し、モデル

ケースを作っていくというご提案もあったかと思います。

こうしたことを次回以降に検討していくために、アンケートを行ってはどうかというアイデアが前回の会議で出ていましたが、私個人の意見となりますが、アンケートはこれらにはふさわしくないかと思います。アンケートは実施しない方向で進めてよろしいですか。

(全委員)

賛同。

(委員長)

次にもう1つのアイデアとして前回出ていたのが、どなたか有識者をゲストスピーカーとして招き、話題提供していただくというものでした。この点はいかがでしょう。ゲストスピーカーではなく、委員のどなたかに発表していただくのも一案かと思いますが。

(委員)

この委員会にはそれぞれ違う領域を持つ社会教育委員が集まっているので、各分野で何ができるか、役割を担えるかといった領域整理を社会教育委員会で話し合うのが効率的だと思います。そう考えると、最初は委員の小学校をモデルケースにして、学校がやっていることに対して、このメンバー達がどのようなことができるのかを話し合うのがいいと思います。

(委員)

同意見です。例えば、学校の図書室だけでは賄えなかったり、読み聞かせできない家庭がある現状に対して、学校としてどのような取組をしているか紹介してもらって、それに対して、各社会教育委員の領域からはどのような関わり方ができるか、役割を担えるかアイデアを出し合いながら言葉にして整理することがいいと思います。

(委員)

委員の学校では、今こういうことが足りなくて困っているといった話から始まってもいいと思います。

(委員)

同意見です。そこから始まり、私達ができることや担ったらおもしろくなりそうなことを追加して領域整理していけば、架空のまちでの架空事例に対して地域の皆でどう壁を乗り越えていけるかができあがると思います。そのため、ベースとなる最初のケースとしてわざわざ今の県の施策を整理する必要はないです。

(委員)

同意見です。最初の事例として県の施策を整理する必要はありません。なんだったら私の学校の事例をお話ししてもかまいません。

(委員)

委員と委員のお二人から発表いただき、その2事例に対して社会教育委員会で領域整理をすればいいのではないのでしょうか。

(両委員)

分かりました。

(委員)

本日委員からいただいた発表は本当に素晴らしい方向性を示してくださったと思います。提言書にまとめるとすれば、理論はこの発表資料からもってきて、それにモデルケースが2つ加われば、提言書も見えてくるのではないかと思います。

(全委員)

賛同。

(委員長)

それでは、次回の社会教育委員会は、外部から有識者を招き発表していただくということとはせず、委員、委員にモデルケースの下地になるようなお話をいただくということでお願いします。

(委員)

追加として2点意見を述べさせてください。1点目は、本日の協議の中で、家庭教育支援の目指すものは子どもの可能性の保障であると合意ができたと思いますが、やはり家庭教育とは家庭を支援していることが前提だと思いますので、子どもだけでなく困っている親もいること、親をないがしろにはしないということを、私たちの頭の片隅に置いておくことが重要かと思います。

2点目は、学力も大切ですが、楽しみながら学ぶということはやはり子どもたちにとってはとても重要です。今、文科省などで議論されている学校教育と社会教育の関係性については、近年はやや社会教育が社会基盤にあるという議論がなされている中で、学校の補完としての社会教育という位置付けで果たしていいのか。基礎学力が基盤になってくると、やはり学校が大事だから社会教育は二の次であるというような議論にもなりかねないのではないかという懸念があります。やはり委員もおっしゃったように、社会教育委員としては戦略的に社会教育の意義を位置付けていくことを意識的にやっていったほうがいいかと思います。基礎学力のボトムにある何かを社会教育の価値としておくのか、あるいは基礎学力と並行して社会教育の価値を置くのかも、次回の事例をとおして検討する際の論点になってくると思います。

(委員長)

次回のモデルケースを検討する際に重要な視点を提起いただいたと思います。

本日の議事はこれで終了します。

2 その他（15:55～16:00）

【高知県社会教育委員連絡協議会の役員選出】

全会一致で、委員に決定。

【委員からのお知らせ】

ふるさとワーキングホリデーについて紹介